

# カリキュラム評価におけるCIPPモデルの文脈評価の意義に関する研究

野 澤 有 希\*

(平成27年8月20日受付；平成27年10月26日受理)

## 要 旨

本研究では、CIPP (context, input, process, product) モデル、すなわち、文脈評価、入力評価、プロセス評価および結果評価の中で、特に文脈評価の内容と意義を考察した。まず、四段階評価の構成的方向性 (formative orientation) と総括的方向性 (summative orientation) の役割を考察した後、文脈評価で目標設定のプロセスが重要であり、改善と意思決定が含まれることを明らかにした。また、CIPPの文脈評価の目標設定と計画段階を分離する視点、ニーズを重視する視点、問題と目標の優先順位をつける視点を検討した。カリキュラム評価における意義としては、以下にまとめられる。

第一に、CIPPモデルを利用し、学校全体のカリキュラム改善のための評価システムを構築することができる。我々はこれまでの教師による生徒評価を重要視する視点から、SBCD (School-based curriculum development) とカリキュラムマネジメントの視点に変える必要がある。

第二に、学校の教育目標を設定する際、CIPPモデルの文脈評価の内容に基づいて行えば、目標がより明確にすることができる。

## KEY WORDS

curriculum evaluation カリキュラム評価 curriculum management カリキュラムマネジメント  
CIPP (context, input, process, product) model CIPPモデル context evaluation 文脈評価

## 1 問題の設定

本研究の目的は、カリキュラム評価のために、アメリカの教育学者スタッフルビーム (Stufflebeam, D. L.) のCIPP (context, input, process, product) モデル、すなわち、文脈評価、入力評価、プロセス評価および結果評価のうち、特に文脈評価の内容を中心に再検討し、その意義を明らかにすることである。

スタッフルビーム (1971, 1983, 2003) が「評価の最も重要な目的は証明ではなく、改善である」<sup>1)</sup>と指摘している。安彦 (1999) も「教育評価の目的は狭義には『教育活動の改善』にある」と述べた<sup>2)</sup>。カリキュラム評価とは、編成されたカリキュラムの目標が達成できたか否かを点検し、その改善点を見出し、次のカリキュラム開発のプロセスに活かすための活動である。しかし、目標設定の過程で十分に検討されない場合には、評価不可能な目標、実現可能性の少ない目標、あるいは実状に相応しない目標を設定し、目標と教育活動の乖離が生じてしまう。すなわち、目標の空洞化・形骸化現象に陥る。目標が不明確になると、その後の教育活動の方向性が失われ、評価の方法、改善すべき事項および時期を見出せない結果となる。また、教育活動の結果を教育目標の達成度で評価するので、具現化されていない目標はフィードバック活動による問題と課題の析出ができないし、次のサイクルに活かせない。現在、多くの学校が設定した教育目標は、教育委員会に提出するための抽象化されたもので、改善につながらない。

この問題点を解決するために、筆者がCIPPモデルに注目する。とくにCIPPモデルのC (context) すなわち文脈評価はカリキュラム評価の重要な段階であり、どのように目標を設定するかという点で示唆を示してくれた。CIPPモデルは、カリキュラム評価に関する情報を系統的ならびに継続的に収集するためのモデルであり、また、学校という組織の中で、意思決定に情報提供することができるモデルでもある<sup>3)</sup>。文脈評価の段階ではどんな情報を収集するか、また、どんな意思決定をするかを解明することによって、学校レベルの目標設定が改善につながるようになる。田村 (2011) はカリキュラムの評価と改善を志向しているカリキュラムマネジメントの研究の中で、教務主任を対象として「カリキュラムマネジメント実施上の困難点」を調査し、評価と改善段階の困難さを指摘した。その主なものは「評価の実施が不十分」、「評価基準・方法・体制の不備」、「評価に否定的な教職員の存在」、「評価から改善につながらない」、「具体的に有効な改善策ができない」が挙げられている<sup>4)</sup>。これらの困難点の中では、教職員が評価活動に対する否定的な意識の問題、評価の体制の不備、実施の不十分および方法と基準の不明確という失敗の要因があ

\*学校教育学系

る。一方、具体的に評価から改善につながらない、有効な改善策がないという要因は、教育目標の設定のプロセスと状況分析に問題があると筆者が考える。その理由としては、教育目標の設定が曖昧になると、評価の方法と基準が定まらないし、実施後の改善点が見出せないからである。

近年、提唱されたカリキュラムマネジメントとは「各学校が教育目標の達成のために、児童・生徒の発達に即した教育内容を諸条件とのかかわりにおいてとらえ直し、これを組織化し、動態化することによって一定の教育効果を生み出す経営活動である」<sup>5)</sup>ということである。ようするに、各学校は教育目標を達成するために、カリキュラムを自主的にデザインし、評価し、効率的かつ組織的に学校運営を行うことである。特に、これらの組織化・動態化する教育活動は教育目標を方向性とビジョンとし、展開することになる。それゆえ、教育目標を設定するプロセスは重要視しなければならない。教育目標を設定するためには、学校レベルの外部要因と内部要素を総合的に状況分析する必要性がある。具体的には、ニーズ、問題点をどのように優先順位をつけるか、人的資源と物的資源をどのように配置するか、だれを中心に実施するかなどが挙げられる。

周知のようにカリキュラムマネジメントはP(plan)-D(do)-C(check)-A(action)サイクルを利用し、フィードバック活動が最後の段階で生み出すのは一般論である。評価の結果は改善活動に活かし、CとAから次のサイクルのPへのつながりがきわめて重要である。カリキュラムマネジメントだけではなく、学校評価ガイドラインでも、PDCAサイクルが提唱されている<sup>6)</sup>。このサイクルが教育のあらゆる場面で提唱されているが、教育現場から生まれた方法論ではなく、経営論の品質管理法である<sup>7)</sup>。それゆえ、このサイクルは多様なニーズがある複雑な教育場面には十分に対処できない一面もある。よって、品質管理法のためのPDCAサイクルが教育現場に適合するかどうかは議論が必要である。経営学理論ではPDCAサイクルを回すための目標設定の重要性を指摘している。「回せないすべての原因は『計画のだめさ』にあり」、「うまくいかない理由はそもそもPに問題があり」<sup>8)</sup>、「いったい何のために目的・目標なのか。これを失った瞬間、計画は間違った方向へ進みかねない」<sup>9)</sup>。これらは、目標の空洞化現象である。そもそも、品質管理法は商品の出来上がった最後の段階で品質改良をするために改善活動を行う。教育活動の改善は、教育現場生まれのサイクルが必要である。CIPPモデルの計画段階のI(input)と実施段階P(process)を行う前にはC(context)文脈評価段階を設けている。つまり、C-PDCAサイクルとなる<sup>10)</sup>。CIPPモデルはPDCAサイクルと違って、教育現場で生まれ、各段階で具体的な実施内容を提示してくれた。特に、文脈評価の目標設定段階でも事前の評価と改善というプロセスがあり、教育現場のニーズに応えられるための状況分析が盛り込まれた。

文脈評価は主として目標を設定するための問題、状況およびニーズの情報を収集するための評価である。学校レベルの教育目標をどう設定するかは、カリキュラム活動の最初の最も重要なプロセスである。各授業のねらいと学年の目標は学校レベルの教育目標と全体のグランドデザインに従って設定する。文脈評価による学校の教育目標の設定は児童生徒、保護者および地域住民の教育ニーズに応えることと、現在学校が抱えている問題と課題に対応することが先決要件である。同時に、各学校がいかに特色を生み出せるかがポイントである。

CIPPモデルは、文脈評価、入力評価、プロセス評価および結果評価という四つの段階で、カリキュラムの実施前から実施後まで系統的にカリキュラム評価に関する情報を入手し、分類し、どの段階でも、カリキュラム改善の意思決定に情報提供することができる。浅沼(1980)がCIPPモデルに関して「このような段階的モデルは、評価の役割がカリキュラム開発と実施に至る一連のプロセスの中で、システムの働きをモニターしていくことにあることを認識させた」<sup>11)</sup>と指摘している。これまでの先行研究ではCIPPモデルに関する研究は意思決定のための評価モデルとして、70、80年代の簡単な紹介にとどまり、その多くは文脈評価がもつ意義に対してほとんど注目されてこなかった<sup>12)</sup>。筆者は本稿において、CIPPモデルの役割を検討し、特に、文脈評価の内容と意義に焦点をあてて検討したい。

## 2 CIPPモデルの内容

### 2.1 CIPPモデルの四段階評価

CIPPモデルは、1965年から現在まで50年あまりの歴史をもつが、理論の基本的な枠組みには変化はない。その背景として、60年代中頃から70年代にかけて、アメリカ政府は教育の質を向上させる教育事業に巨額の投資をするようになり、その有効性を評価するためCIPPモデルが開発された。スタッフルビームはCIPPモデルの初期段階の66年から、結果評価よりプロセス評価の重要性を認識し、プロセス評価の情報を記録し、評価の「深度」を追究することを提唱した<sup>13)</sup>。このプロセスの評価を重視する視点の現れはスタッフルビームとタイラー(Tyler, Ralph W.)の評価理論の関係からも見られる。30年代から60年代にかけてタイラーの評価理論は最も賞賛された評価理論である。タイラーの評価理論は「目標基準評価」とも言える。彼の評価理論は八年研究を経て、19世紀末と20世紀初期の教育統計学の

量的研究から脱皮し、新しい評価理論を提起した<sup>14)</sup>。

しかし、タイラーの目標設定の評価理論は生徒の多面的なニーズに応じることができなかった。それゆえ、スタッフルビームは教育効果を評価するために、プロセス評価の重要性を強調した。スタッフルビームは、30年代の八年研究によるタイラーを中心としたカリキュラムの効果に関する研究が不十分であると指摘し、さらに、評価を「意思決定に有益な情報を提供するプロセスである」<sup>15)</sup>と再定義した。そして、四つの評価段階を設けて、意思決定のために絶えず必要な情報を提供できるようにした。スタッフルビームは評価の定義を充足させただけではなく、評価の本質的な役割を解明し、新しい評価の方法論を提示してくれた。現在、このモデルはアメリカで広く応用され、アジアでも広く知られ、利用されている教育評価の方法論である<sup>16)</sup>。表1はCIPPモデルの枠組みを示している。

表1. CIPPモデルの四種類評価<sup>17)</sup>

	文脈評価	入力評価	プロセス評価	結果評価
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・背景を明確にする。</li> <li>・ニーズと目標を確認する。</li> <li>・ニーズに応えられるように条件、資源と機会を確認する。</li> <li>・ニーズに基づき問題を確認する。</li> <li>・目標はニーズに応えられるかどうかを判断する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・システムの能力を確認し、評価する。実現可能なストラテジーを練る。</li> <li>・選択されたストラテジーの順序、予算及び日程を念入りに確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画の設計及び実施の中の欠点を確認、予測する。</li> <li>・意思決定のために情報を提供する。</li> <li>・これからの分析と判断のためにプロセスの中の活動を記録する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結果に関して記録し、判断する。</li> <li>・結果を目標、文脈、入力、プロセスの資料と関連し、比較する。</li> <li>・メリットと価値を解釈する。</li> </ul>
改善過程と意思決定の関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境背景の意思決定。</li> <li>・目標と優先順位の意思決定。</li> <li>・潜在的な困難の表出と解決策。</li> <li>・ニーズを評価して結果評価の判断の基礎になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支持の資源と問題解決の方策の意思決定。</li> <li>・健全な計画の設計、順序、予算及び人員配置を説明する。</li> <li>・実行を管理及び判断する基礎になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画の設計、順序と実施の修正の意思決定。</li> <li>・プロセス評価と結果解釈するために根拠として実際のプロセスを記録する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の継続、中止、修正あるいは新しく調整するための意思決定。</li> <li>・明確な結果報告（意図的と非意図的、ポジティブとネガティブ）。</li> <li>・メリットと価値を判断する。</li> </ul>

Stufflebeam, D.L. (2000) の内容の一部により筆者が整理した。

表1のCIPPモデルでは、水平次元に文脈評価、入力評価、プロセス評価、および結果評価が設定され、この四つの評価によって、目標の設定、計画、実施、および結果の全過程に関する情報を記録するようになっている。この四つの評価はカリキュラムマネジメントの新しい評価サイクルを生み出している。つまり、文脈評価によって、目標設定と計画のプロセスを違う段階として区別している。文脈評価の意義はカリキュラム評価に関する問題、ニーズ、および状況などの情報をもとに、目標の内容と設定過程を具体化かつ合理化にする点にある。また、入力評価は教育資源を分配し、ニーズを満たすためのストラテジーを計画するものであり、さらに、プロセス評価は実践活動を評価し、結果評価は成果確認の役割を果たすものである。この四つの評価段階による評価のサイクルが絶えず循環することによって、カリキュラム評価のフィードバック情報が収集され、その分析結果をもとに、カリキュラム改善につながることが最大のポイントである。すなわち、CIPPモデルの四つの評価種類によって、カリキュラム開発の全過程を点検し、評価活動と改善活動を一体化にすることである。この四つの評価の役割を具体的に言えば、文脈評価はニーズ、問題、およびフィードバック情報などによって、目標を修正し、あるいは新しい目標を設定することもでき、入力評価は教育の人的、物的資源を有効的に利用するため、計画を「微調整」することができる。プロセス評価は実施過程を改善することができ、結果評価は効果の確認、計画の中止、継続および修正による改善の意思決定を行うことができる。

## 2.2 構成的 (formative) と総括的 (summative) な視点から見る改善の時期

これから、構成的評価と総括的評価の観点から教育活動のどの段階で改善活動が必要であるかを考察していく。周知のように初めて構成的評価 (formative evaluation) と総括的評価 (summative evaluation) を提唱した人物はスクリブン (Scriven, M.) である。構成的評価はプログラム開発又は改善の途中に行われるが、総括的評価は活動の最終後に実施する評価である。スタッフルビームはCIPPモデルを利用する際、スクリブンの評価観点と同様にこのモデルの構成的方向性と総括的方向性の役割と内容を詳しく分析した。表2と表3に示すように、スタッフルビームは



1983年の構成的方向性（formative orientation）が意思決定であり，総括的方向性（summative orientation）が説明責任であることを指摘している。2003年の構成的方向性の役割は改善であり，総括的指向性は説明責任である。二つの表の構成的方向性が異なることがわかる。1983年の構成的方向性は意思決定が重視されるけれど，一方，2003年には改善が重視される。スタッフルビームは2003年に評価の定義を改善の意思決定のために情報提供することとし，学校改善を重視することがわかる<sup>18)</sup>。また，文脈評価，入力評価，プロセス評価および結果評価という四段階ともに総括的方向性の説明責任を果たす必要がある。

表2 CIPPモデルの意思決定と説明責任の役割（スタッフルビーム，1983）<sup>19)</sup>

	文脈評価	入力評価	プロセス評価	結果評価
意思決定 （構成的方向性）	目標と優先順位の選択を導く	プログラムの戦略の選択，手続上の手順の設計図を導く	実施を導く	終結，継続，修正または定着を導く
説明責任 （総括的方向性）	ニーズ，機会，問題に基づき，解決する問題の優先順位と設定した目標の記録	選ばれた戦略の構想および他の代替案を選択した理由の記録	実際のプロセスの記録	到達度と再循環の意思決定

Stufflebeam,D.L. (1983) の内容により筆者が作成

表3 CIPPモデルの改善と説明責任の役割（スタッフルビーム，2003）<sup>20)</sup>

	文脈評価	入力評価	プロセス評価	結果評価
改善 （構成的方向性）	目標と優先順位の選択を導く。	プログラムの戦略の選択，手続上の手順の設計図を導く。その一覧表および予算。	実施を導く。	終結，継続，修正または定着を導く。
説明責任 （総括的方向性）	ニーズ，機会，問題に基づき，解決すべき問題の優先順位と設定した目標の記録	方案および設計図の記録，他の代替案を考える。	実施されたプロセスおよび関連の実費を記録する。	成果，ニーズ，実費および意思決定を比較し，記録する。

Stufflebeam,D.L. (2003) の内容により筆者が作成

この表2と表3から，CIPPモデルの四段階評価の構成的と総括的方向性と内容を示している。つまり，改善と意思決定は教育活動の目標設定，計画，実施，および結果の段階で絶えず行うことが必要である。それゆえ，今までの結果段階だけで改善を行う認識は不十分である。改善はいつ行われるか？改善は教育活動の最終段階で行うだけで十分であるか？これらの問題に対して，CIPPモデルの構成的と総括的方向性の内容を考察した後，教育活動のすべてのプロセスで改善が必要であることを明らかにした。このように，文脈評価すなわち目標設定のプロセスでも改善を行い，説明責任を果たす必要がある。

これから，表1，表2及び表3の文脈評価の内容に基づき，文脈評価では教育目標を設定するために，どんな情報を収集すべきかを明確にしたい。

- ニーズ情報を収集する。
- 背景情報を収集する。
- ニーズに応えるための条件，資源，機会を確認する。
- 問題を確認する。
- 目標と問題の優先順位をつける。

このように目標を設定するために，ニーズ，問題，機会，資源などの状況に関する情報を収集する必要がある。つまり，文脈評価の段階で目標設定をするために，絶えず情報を収集し，改善と調整が重要である。

教育目標は学校全体の教育活動の方向性とビジョンである。学校全体の教育活動を改善するためには，カリキュラムグラントデザインが必要である。日本の学校が授業研究と授業改善を重視しているが，学校全体的なカリキュラム開発と改善の視点が欠けている。安彦（2009）は「日本の授業研究が，カリキュラムを改善したという例は少ない。各教科等の内部では一時的に多少見られるけれども，随時，日ごろの授業研究が学校のカリキュラム全体を改善した

り、改善に役立つ授業研究として活用されたりしているかといえ、そういう例はまれである。」と指摘した<sup>21)</sup>。また、スタッフチームは「いつ、評価を行うべきであるか。それは、理想的には、学校の全ての教育活動が進行の時期である」と指摘した<sup>22)</sup>。このように、教育活動の評価と改善は教師による児童生徒に対する評価、授業に対する評価だけではなく、学校全体の教育活動のプロセスが対象となる。特に、効率的に学校改善のサイクルを循環させるために、最初の目標設定の段階が最も重要である。それゆえ、これから、必要な議論はどのように教育目標を設定するか、その教育目標が達成したか、改善点はどこにあるかということである。学校現場では、教育目標と教育目的を区別できなく、抽象化された目標、あるいは評価不可能な目標が多々設定された。例えば、T市の六つの小学校のグランドデザインに掲げられた教育目標と重点目標を見てみよう（T市小学校総数19校、平成27年度グランドデザインをインターネット上に公開された学校数10校、学校名を特定できる学校数1校と重点目標を掲げていない学校数3校を除く）。

表4 T市小学校の教育目標と重点目標

T市小学校	教育目標	重点目標
小学校A	心ゆたかにかしこくたくましく	ねばり強く考え 進んで伝え合う子ども 自分や友人のよさを見つけ 進んでかかわろうとする子ども 健やかな体づくりに自発的に取り組む子ども
小学校B	なかよくかしこくたくましく	自他と気持ちよく交流できる子ども 仲間と学び合う中で確かな学力を付ける子ども 仲間と共に自己ベストを目指す子ども
小学校C	やさしくかしこくたくましく	あたたかい心 確かな学び 丈夫な体
小学校D	明るくきまりよくいきいきと	よりよくなろうという意志をもっておもいっきり自分を出せる子
小学校E	正しくたくましく	自分の考えをもち進んで伝える子 よいと思ったことを実践する子 健康な生活をつくり出す子
小学校F	優しさとかしこさをもちたくましく生きる子	目標をたてて 積み重ねを大事にし 意欲的に取り組む子

上述の教育目標の中では、小学校Aから小学校Fまで、「かしこく、たくましく、明るく、きまりよく、なかよく、いきいき」のような文言は児童生徒の姿であり、理想像である。教育目標として掲げるには吟味する必要がある。例えば、学校教育を受ける前にも、我々は日常生活で「かしこい、たくましい、やさしい」などの表現で子どもの姿を描写する。一般的には、教育目標は各学校の教育ビジョンであり、方向性を示すものである。教育目標を達成するために、細分化し、重点目標を設定する。けれど、表4に示したように、教育目標と重点目標の内容は関連性がなく、一致していない場合が多い。小学校Aの教育目標が「心ゆたかにかしこくたくましく」と掲げているが、「ねばり強く考え、進んで伝え合う子ども、自分や友人の良さを見つけ、進んで関わろうとする子ども、健やかな体づくりに自発的に取り組む子ども」という重点目標と関係性が薄く、抽象的な表現である。特に、「なかよく、かしこく、たくましく」のような目標を設定すると、カリキュラム開発と評価の計画が立てられない。さらに、課題と改善点を見出すことが困難である。小学校Bから小学校Fまでも同様である。

「人格の完成」という教育目的を達成するために、各学校が教育目標を設定する際、「生きる力」に対する理解を深める必要がある<sup>23)</sup>。どんな資質・能力を育てたいかという内容を教職員全員がよく話し合い、学校の現状と児童生徒のニーズに応えるように決めればよい。「かしこい、つよい、たくましい」のような抽象化された表現ではなく、グローバル人材の育成を図るため、新しい能力に対応できる教育目標が求められている。現在、知識基盤社会において、「課題を見出し解決する力」、「知識・技能の更新のための生涯にわたる学習」、「他者や社会、自然や環境と共に生きること」などの能力が求められる。また、世界においても、今日的に育成すべき人間像をめぐって、断片化された知識や技能ではなく、人間の全体的な能力をコンピテンシー（competency）として定義し、それをもとに目標を設定し、政策をデザインする動きが広がっている<sup>24)</sup>。OECDも人生を成功させるため、鍵となる重要なコンピテンシーを発表した。「21世紀型能力」の公表は以下の共通認識「社会の変化に対応できる汎用的な資質・能力を教育目標として明確に定義する必要がある。」と掲げ、「生きる力」としての知・徳・体を構成する資質・能力から、教科・領域横断的に学習することが求められる能力を資質・能力として抽出し、これまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ、それらを「基礎」「思考」「実践」の観点で再構成した日本型資質・能力の枠組みを提示してくれた<sup>25)</sup>。このように、教育目標を具現化するために、教育理念の「生きる力」と「21世紀型能力」に対する理解を深める必要がある。

### 3 文脈評価の視点と意義

#### 3.1 目標設定の段階と計画段階を分離する視点

文脈評価とは、学校を取り巻く問題、環境、背景、およびニーズに関する情報を収集し、その分析結果をもとに、目標を設定する活動である。文脈（context）という語は言語学において、文章の筋道を分析する際に、文中での語の意味の続きぐあい、文章の中での文と文の続きぐあいの意味として、よく使われる用語である。この用語の比喩的な意味として、物事の筋道、状況、背景という意味もある。本論文が扱う文脈の意味はこの比喩の意味であり、特にカリキュラムをめぐる背景と状況を指し示している。CIPPモデルの中でも、文脈評価に注目する理由は、各学校を取り巻く環境と背景が異なる状況をカリキュラム評価の文脈として取り上げられるからである。

カリキュラムマネジメントのPDCAサイクルと違い、CIPPサイクルの文脈評価は達成すべき目標設定のプロセスを一つの段階として設けて、計画の段階と分離しているという特徴を有している。カリキュラムの複雑性と流動性を考えれば、目標を設定するためには、学校の内的要素と外部要因を分析する必要がある。なぜなら、目標設定は、カリキュラム活動の最初の段階であり、方向性を決めるプロセスだからである。例えば、天野（1989）は「学校目標の設定にあたって、一般的に考慮されるべき条件は次の点である。①児童、生徒の実態、一人ひとりの教育要求、親や教師の願い。②地域の実態（学校を取り巻く地域の自然的、文化的、経済的環境）。③前述のようなナショナルなレベルおよびローカルなレベルの法規上の教育目標規定」<sup>26)</sup>であると指摘した。学校に基礎をおいたカリキュラム開発は、国の教育課程の基準に従うことは無論であるが、当該地域の実情も考慮しなければならない。日本と外国の社会と文化などの文脈は明らかに異なっており、日本の各地でも地域差が存在しているので、一概に扱うことはできない。

文脈評価の役割は目標をより明確化および焦点化できる点にある。学校範囲でのカリキュラム開発の目標を設定する際には、学校の実態と問題点を事前に評価する必要がある。文脈の重要性に関しては、シュワブ（Schwab, J.J.）が60年代のカリキュラム理論を批判し、理論的強調から実践的強調への転換を試みており、彼は実践的問題に含まれる状況的文脈を重視している<sup>27)</sup>。現在、各学校が長所と短所、資源、問題などの状況を分析し、カリキュラム開発による学校の特色を生み出すという課題に直面している。

OECDのCERIが長年SBCD（School-based curriculum development）、すなわち学校を主体としたカリキュラム開発という理論が提唱された。SBCDの一般的な戦略としては、「工学的接近」があり、「最初に、一般的な目標を立てる。これは要求評定（need assessment）により定式化されていく。次にその一般的な目標がより具体的な特殊目標に分節化される。ついで、その特殊目標がいわゆる『行動目標』に定式化される。」<sup>28)</sup>と指摘したように、教育目標を重点目標、行動目標へ細分化する必要がある。カリキュラム評価の内容の複雑性から見ると、各学校は重要なニーズと問題点に焦点を絞る必要がある。問題点と目標は一つに限らず複数の場合もあるので、各学校は一つの目標に限らず、サブゴールも設定する可能性もある。その優先順位をつけることも文脈評価の目的である。上述のように、目標設定のプロセスは計画段階と分離し、全校の教職員が議論を重ねて、文脈評価を行う必要がある。

#### 3.2 ニーズを重視する視点

筆者は文脈評価に含まれているニーズを重視する視点に注目する。文脈評価に含まれるニーズ・アセスメントとはニーズに関連する情報を意思決定のために収集することである。ニーズの情報を収集し、分析する際、①どのような組織でニーズの情報を収集するか、②児童生徒、保護者及び地域住民のニーズを把握するために、どのようにアンケートのニーズ項目を設定するか、③ニーズ情報を収集し記述し分析整理して、どのニーズを優先して応えるべきかという問題に注目すべきである<sup>29)</sup>。

文脈評価の目的は、目標設定である。我々は文脈評価、すなわち目標を設定する段階では、ニーズを中心に設定することが重要である。各学校はニーズに関する情報が違うので、設定された目標と基準も違うはずである。ニーズ・アセスメントを中心に、各自の状況分析により、実現できるような目標と適切な基準を定めることがカリキュラム評価の課題である。

目標の適切性を判断するには重要な基準はニーズに応えられるか否かということである。ニーズに基づいて、ゴールとサブゴールが存在する可能性がある。カリキュラム評価においてニーズを中心に目標設定するというのは、教える側の目線ではなく、教育を受ける側の要求を重視することである。これは学校のパラダイムの転換でもあり、価値観の転換でもある。なぜなら、これまでの公立学校の閉鎖的な文化伝統を打破することを意味しているからである。児童生徒、保護者および地域の住民のニーズを取り入れることによって、開かれた公立学校の改善を図り、説明責任



を果たす。例えば、CIPPモデルの各段階の評価レポート、文脈評価の目標の適切性、ニーズ情報の分析結果、及びフィードバック情報の内容を公開することである。

### 3.3 問題と目標の優先順位をつける視点

文脈評価では各学校の問題、ニーズおよび状況を評価し、実現可能な目標を設定することが重要である。教育目標を設定し、目標の達成度を評価する。同時に、結果評価により改善点をフィードバックし、次年度の目標設定に情報を提供する。全ての学校は問題を持っており、その問題を解決するために、解決策が必要である。けれども、多数の問題の中から抽出し、優先順位をつけて、問題解決に取り組むことは容易ではない。また、問題を顕在化するために時間がかかる。さらに、教育目標も一つに限らないため、優先順位をつける必要性が出てくる。教育目標から重点目標に細分化してから、カリキュラムの実施活動の行動目標が明らかになる。目標の内容が最も重要なニーズと問題点に焦点をあてなかった場合には、教育目標を見直すことも考えられる。また、カリキュラム評価の途中で、もっと重要な事項が明らかとなった場合には、目標を変更あるいは修正する必要性が生じる。この目標設定の実施と修正状況が、カリキュラム開発の成敗を握っていると言っても過言ではない。しかし、学校現場には実現しにくい目標、評価しにくい目標が多く存在している。このような目標は現実の状況に対応していないため、カリキュラムの効果が見込めない。つまり、各学校は状況分析により、自主性を高め、問題点を摘出し、実現可能性のある教育目標を設定することが重要である。

これまで、日本では、文脈評価の内容が看過され、実践上、その内容と方法が明確ではなかった。筆者は目標と計画の分離の視点、ニーズ・アセスメントの重視、問題と目標の優先順位をつける視点を中心に検討した。文脈評価の意義としては、カリキュラムを計画する前に、問題、ニーズ、目標および優先順位に関する情報を収集し、分析した後に、達成できる目標を設定する点にある。現在、多くの学校の目標は抽象化されて、掲げるだけの目標になっている。それらの目標は、現実の状況に適合していないため、達成できないし、改善点を見出せない。文脈評価はより現実的かつ合理的な目標を設定することを目指している。

## 4 結論

カリキュラム評価が学校改善に大いに役立つと筆者が考える。特に、学校レベルのカリキュラムマネジメントで全体を俯瞰する目を持ち、教育効果を高める認識を高める必要がある。学校改善を図るために各学校ではカリキュラムマネジメントサイクルを循環させ、そのフィードバックの情報を即時改善に役立つことが重要である。このフィードバック活動は最初設定された教育目標の達成度の検証と次年度の新しいサイクルという両方向への反映と調節が含まれると考えられる。

これまでのCIPPモデルの内容と役割を検討し、このモデルを利用し、改善の意思決定のために情報提供というサイクルが生まれる。CIPPモデルと文脈評価の意義として、以下の二点にまとめられる。

第一に、カリキュラム改善のためにCIPPモデルを利用し、学校全体の改善サイクルを構築することができる。我々はこれまでの教師による児童生徒評価を重要視する視点から、学校全体的なカリキュラム評価とカリキュラムマネジメントの視点に変える必要がある。図1のように、ワークシート法を利用し、CIPPサイクルの内容に従って、カリキュラムに関する情報を収集し、分析し、提供することによって、カリキュラム評価を継続的および系統的な評価活動に変えることができる。

第二に、文脈評価を重視する視点が必要である。計画段階に入る前に、文脈評価の内容に基づき、全校の教職員が学校の現状と情報に関する議論を通じて、教育目標を設定し、共同理解を深化させる。これによって、目標がより明確になり、ビジョンを共有することができる。文脈評価の特徴としては、カリキュラムを計画する前に、問題、ニーズ、長所と短所、及び資源に関する情報を収集し、優先順位をつけて、達成できる目標を設定する点にある。特に、今まで軽視されている児童生徒、保護者及び地域住民のニーズ情報を収集し、応えることが重要である。文脈評価を行えば、これからのカリキュラム実施活動の方向性とビジョンが明確になり、結果評価の達成度も確認できる。文脈評価の内容に関する検討は、これからのカリキュラム評価研究に欠かせないと考えられる。各学校がどのようにニーズと問題を焦点化して、優先順位をつけて、教育目標を設定するかは、各学校の創意工夫が必要になってくる。これから、児童生徒、保護者および地域社会のニーズに応えられるようにカリキュラムマネジメントを議論する必要性がある。ニーズ・アセスメントにより、教師の教授活動を中心とした教育を、家庭と地域の連携を図り、ニーズ重視の教育に変えることが期待できる。

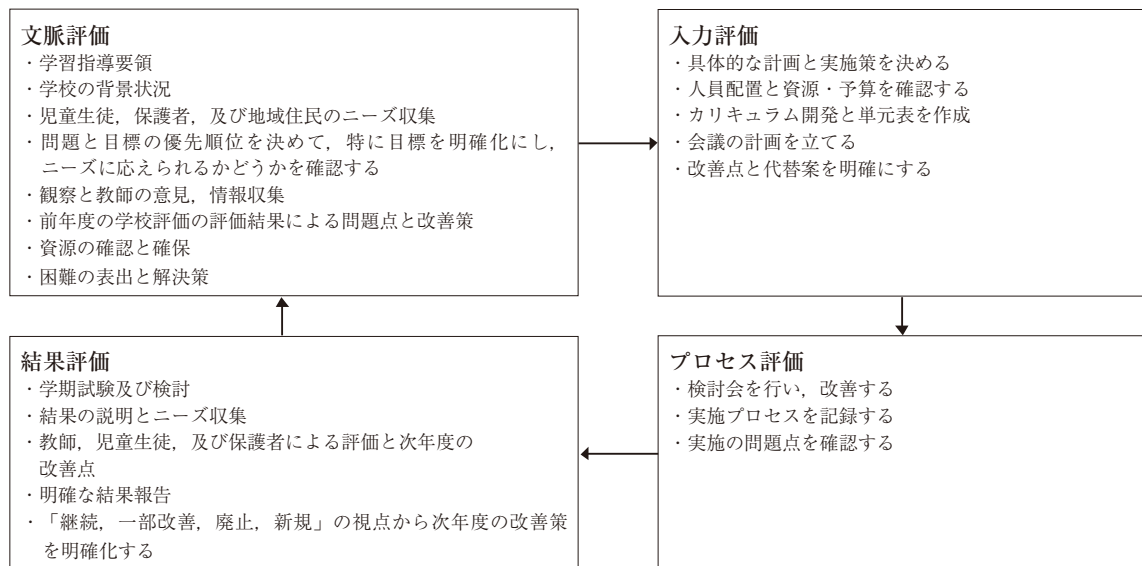


図 1. CIPPモデルで考察するカリキュラムマネジメント

## 注

- (1) Stufflebeam, D.L. 1971 *The Relevance of the CIPP Evaluation Model for Educational Accountability*. Ohio State Univ., Columbus. Evaluation Center.  
Stufflebeam, D.L. 1983 "The CIPP model for Program Evaluation", In Madaus, G.F., Scriven, M. & Stufflebeam, D.L. (eds.), *Evaluation Model*, Boston: Kluwer-Nijhoff, p. 117.  
Stufflebeam, D.L. 2003 "The CIPP model for Evaluation", Paper presented at the 2003 Annual Conference of the Oregon Program Evaluation Network (OPEN) Portland, Oregon 10/03/2003 p. 4.
- (2) 安彦忠彦 1999年「カリキュラムの評価的研究」安彦忠彦編集『カリキュラム研究入門』勁草書房, 181頁。
- (3) 拙稿 2012年「カリキュラム評価におけるCIPPモデルの意義に関する研究－意思決定に情報を提供する視点を中心に－」比較教育学研究, 第45号, 137-156頁。
- (4) 田村知子編著 2011年『実践カリキュラムマネジメント』ぎょうせい, 12頁。  
田村は2007年にT県U教育事務所管内の教務主任124人対象に実施した自由記述式の質問紙調査の結果に基づいた。(集合調査法, 回収率95.2%)
- (5) 中留武昭 田村知子 2004年『カリキュラムマネジメントが学校を変える』学事出版, 11頁。
- (6) 文部科学省 平成20年『学校評価ガイドライン(改訂)』, 47頁。
- (7) PDCAサイクルは第二次大戦後に、デミング(W. Edwards Deming)らによって提唱された品質管理法である。彼自身が「PDS(study)A」サイクルという表現を好んで使っている。Planは従来の実績や将来の予測などをもとにして業務計画を作成することで、Doは計画に沿って業務を行い、Checkは業務の実施が計画に沿っているかどうかを確認し、Actは実施が計画に沿っていない部分を調べて処置することである。  
Deming, W. Edwards 1994 *The new economics* (2nd ed.), Massachusetts Institute of technology, Center for advanced educational services, pp. 131-133.
- (8) 川原慎也 2012年『これだけPDCA』すばる舎リンクージ, 18, 22頁。
- (9) 同上書, 66頁。
- (10) 田村, 中留らもカリキュラムマネジメント理論でPDCAサイクルを用いたけれど、評価段階のCを重視することでCAPDの応用を提唱している。  
田村知子 本間学 2014年「カリキュラムマネジメントの実践分析方法の開発と評価」『カリキュラム研究』日本カリキュラム学会編 第23号, 46頁。
- (11) 浅沼茂 1980年「アメリカにおけるカリキュラム評価論の変遷」『教育学研究』日本教育学会編 第47巻3号, 220-229頁。
- (12) 例えば、安彦はスタッフルームが意思決定に関わる変数を七つ取り出したことを分析した。今野はスタッフルームの価値判断のための情報提供の論点をまとめた。浅沼も簡単な紹介の枠にとどまった。  
浅沼茂 1980年「アメリカにおけるカリキュラム評価論の変遷」『教育学研究』日本教育学会編 第47巻3号, 220-229頁。



- 安彦忠彦 1979年「教育課程の経営と評価」『教育課程の理論と構造』今野喜清 柴田義松編集 学習研究社, 306-321頁。
- 今野喜清 1977年「カリキュラム評価のモデル構成」(海外教授学研究情報No28)『現代教育科学』, 113-131頁。
- (13) Stufflebeam,D.L. 1966 *A depth study of the evaluation requirement*, Theory into Practice, pp.121-133.
- (14) Tyler,Ralph W. 1983 "A Rationale for Program Evaluation", In Madaus, G.F., Scriven,M. & Stufflebeam,D.L. (eds.), *Evaluation Model*, Boston: Kluwer-Nijhoff, p.75.
- (15) Stufflebeam,D.L. 1969 "Evaluation as enlightenment for decision making", In H.B.Walcott *Improving educational assessment and an inventory of Measures of affective behavior*, Washington, DC: Association for Supervision And Curriculum Development and National Education Association, pp.14-73.
- (16) スタッフルビームはアメリカの有名な教育学者であり, Joint Committee on Standards for Education evaluationの会長を務めた。また, ミシガン大学の教育評価センターの責任者でもある。スタッフルビームは1965年にコロンバス・プロジェクト(就園前のプロジェクト, 数学, および読解力改善プロジェクトなどが含まれる)を評価する際に, タイラーの行動目標評価論の不足を指摘し, 評価を再定義した。CIPP評価モデル理論がアメリカの教育研究者スタッフルビームにより提唱され, オハイオ州立大学の評価研究センターで研究された。また, アメリカの各地(Ohio, Texas, Michigan)の公立学校で応用された。現在, カナダ, フィリピン, グアムなど世界の各地で応用されている。教育分野以外のプログラムにも, 評価の一般的なモデルとして使われている。
- 台湾などのアジアでの応用については以下を参照。
- 例えば, <http://www.cges.ilc.edu.tw/cges/gov/teach/2007>
- 林和春 2002年「教育機構の評価におけるCIPPモデルの応用」『学校行政』双月刊第20期, 中華民國学校行政研究学会, 23-51頁。
- (17) Stufflebeam,D.L. 2000 "The CIPP model for evaluation", In D.L.Stufflebeam, G.F.Madaus & T.Kellaghan, *Evaluation model* (2nd ed.), Boston: kluwer Academic, p.302.
- (18) Stufflebeam,D.L. 2003 "The CIPP model for Evaluation", In Kellaghan,T., Stufflebeam,D.L. & Wingate,L.A. *International Handbook of Educational Evaluation*, Boston: Kluwer Academic, p.34.
- (19) Stufflebeam,D.L. 1983, op.cit., p.125.
- (20) Stufflebeam,D.L. 2003, op.cit., p.35.
- (21) 安彦忠彦 2009年「カリキュラム研究と授業研究」『日本の授業研究(下巻) 授業研究の方法と形態』日本教育方法学会学文社, 18-19頁。
- (22) Stufflebeam,D.L. 2003, op.cit., p.782.
- (23) 文部科学省 平成18年 法律第120号『教育基本法』を参考。
- 文部科学省ホームページ[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/houan.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm)
- 中央教育審議会答申 平成8年『21世紀を展望した我が国の教育の在り方についてー子供に「生きる力」と「ゆとり」をー』9頁。
- (24) 国立教育政策研究所 平成24年度『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』教育課程の編成に関する基礎的研究 プロジェクト研究調査研究報告書, 13頁。
- (25) 同上書, 26頁。
- (26) 天野正輝 1989年『教育課程編成の基礎研究』文化書房博文社, 4-10頁。
- (27) 鄭栄根 1999年2月「カリキュラム開発における教師の役割とその遂行過程に関する研究ーSBCDの視点からー」博士学位請求論文 筑波大学大学院博士課程教育学研究科学学校教育学専攻, 215頁。
- (28) 文部省大臣官房調査統計課 昭和50年2月「カリキュラム開発の課題」カリキュラム開発に関する国際セミナー報告書, 49頁。
- (29) 拙稿 2012年「カリキュラム評価におけるCIPPモデルの役割に関する研究ー教育的ニーズ把握を中心にー」筑波大学教育学会編, 第10号, 37-50頁。

# Meanings of CIPP model in curriculum evaluation focusing on context evaluation

Yuki NOZAWA\*

## ABSTRACT

The purpose of this paper is to present a received evaluation model developed by an American scholar, Professor D.L.-Stufflebeam, which has been applied in school-based development and improvement programs. This model covers four key aspects of an innovation program from its initiation till its implementation in schools, including evaluations on contextual backgrounds and issues (C), inputs on resources and professional development activities for teachers and personnel (I), implementation processes (P) and products and achievements of the innovation programs and curriculum (P). This paper exclusively focuses on the meanings of contextual understanding and evaluation.

The paper will present a full account of the CIPP model with specific focus on the formative function of the model on decision making processes. The summative function will also be outlined. This section will also compare the formative and summative functions of the CIPP model proposed by Stufflebeam in 1983 and the revised version of the model in 2003. The paper will then focus on how decision makings relate to the program improvements. Finally, we discuss about the impact of needs assessment on the determination of program objectives and the design of the implementation process.

First, the CIPP model is a holistic model which assists schools in establishing an effective curriculum system and infrastructure of curriculum innovations. Previous efforts focused on changes at classroom level. Latest development activities should address a holistic approach in school-based curriculum development and improvements.

Second, the role to evaluate the contextual issues and concerns is essential in determining program objectives and learning needs of students. The alignment between contextual needs, learning needs and program objectives will ensure higher implementation of the program.

---

\* School Education